

## 中国青島における貯水山公園の形成と変容

The Formation and Transition of Zhushuishan Park in Qingdao, China

江 本 硯\* 藤川 昌樹\*\*

Benyan JIANG Masaki FUJIKAWA

**Abstract:** This paper aims to analyze how the Zhushuishan Park was formed and transitioned and how the mixed culture of three countries was shown in this park. And what should be emphasized is that it is not only the facilities built on the hill that symbolized the colonial culture, but also the space composition and flora landscape. Generally speaking, the Zhushuishan Park was maintained to be the urban green space through the whole modern period. It was firstly developed as the suburban forest in the German period. A large area of Locust from Berlin and Japanese Black Pine were planted on the hill. However, after that, the Qingdao Shrine was constructed here as the national symbol as soon as Qingdao was occupied by Japan. The Cherry Blossom planted inside the shrine strengthened the Japanese culture. The shrine was preserved by the Japanese government until the year 1945. Therefore, the Qingdao Shrine shaped the characteristic of the hill and left a great effect on its space composition. When the Chinese government received the sovereign of Qingdao and carried out the urban planning, the Hill Zhushuishan was kept to be the urban forest and placed into the urban park system. However, in order to emphasize Chinese culture the Cherry Blossom was replaced by Cedar.

**Keywords:** Zhushuishan Park, urban forest, Qingdao Shrine, transition

キーワード：貯水山公園，都市森林，青島神社，変容

### 1. はじめに

#### (1) 背景と研究の目的

青島は近代植民都市として発展し、数多くの歴史街区、歴史建築と砲台など戦争の遺物を持つ、中国で有名な「歴史文化名城」である。近年、青島は歴史文化の保護を重視し、1995-2010年の「青島市都市全体計画」の第十一章「歴史文化名城の保護と都市の風貌」に歴史文化名城の保護を特定項目として計画した。その中では近代都市文化をテーマとし、都市の空間構成、建築風貌を保護し、人文景観と遺物を積極的に活用すると述べている<sup>1)</sup>。

しかし、都市空間や建築が強調されたが、近代歴史の遺物である公園緑地はあまり注目されていない。それは公園緑地がそもそも都市のアクティブな空間ではないためと推測される。実際、近代における重要な都市空間として、公園緑地は都市計画と関連づけられ、そこには都市建設の理想像が投影されており、人々の生活史も見られ、貴重な文化価値をもっていると考えられる。

本論文は貯水山公園<sup>2)</sup>を例として取り上げる。貯水山公園は近代青島の各時代の要請によって、それぞれの役割を果たし、各時代の文化特徴が顕著に見られるからである。まず歴史背景によって、ドイツ時期(1898-1913)、第一次日本時期(1913-1922)、中華民国時期(1922-1938)、第二次日本時期(1938-1945)、第二次中華民国時期(1945-1949)、中華人民共和国時期(1949)の六段階に分け、各段階の都市建設と関連づけながら、異なる文化的背景により貯水山がいかに取り扱われ、いかなる役割が与えられ、現在の構成ができてきたのかを明らかにする。それをもとに、各時代の貯水山公園の施設、空間構成、植物景観が示している文化的特徴を検討することを目的とする。

#### (2) 研究方法

主史料として用いるのは、ドイツ時代の『膠奥発展備忘録』<sup>3)</sup>(以下、『備忘録』)、日本時代の『青島要覧』<sup>4)</sup>と戦後公開された極秘書類『欧受大日記』<sup>5)</sup>、中華民国時代の『膠奥志』<sup>6)</sup>など都市に関する記録である。まず、これらの史料で都市の拡張のプ

ロセスを把握する。そして、その中に含まれる各時代の都市計画図、市街地図によって、都市の空間を復元的に読み取る。また、古写真や当時の雑誌、回想録によって、当時の社会や人々の生活などのソフト面を理解する。さらに、フィールド・ワークを行い、貯水山公園の現状を把握する。

#### (3) 先行研究

青島における近代建築、特にドイツ時代の建築は中国、ドイツ、日本の研究者に多く研究されている<sup>7)</sup>。近年、青島の都市計画に関わる研究も徐々に増えてきた<sup>8)</sup>。それに対して、青島の公園緑地に関する研究は非常に少ない。わずかに南京林業大学鄭愛芬の修士論文「青島市公園緑地木質植物の多様性」<sup>9)</sup>が青島の公園のサンプルを抽出し、各公園の植物の種類、多様性、分布、樹種の使用頻度の現状について分析しているが、歴史的原因を論じていない。

### 2. 森林緑地としての役割

1898年には「膠奥租借条約」に従って、青島を含む膠州はドイツの租借地になった。その時、青島は漁村であった。ドイツが青島を占領した後、都市計画プラン「新都市の開発計画図」を公布した。これは真っ白の土地の上に策定された青島における最初の都市計画である。建設初期には市街地は地勢と気候の良い小港と青島湾の間の地域に計画され、港、鉄道と重要な施設の位置が決められた<sup>10)</sup>。1901年に公布された都市計画修正案によると、建設範囲は変わらずに、都市は青島欧州人区、大鮑島中国人区と台東・台西の二つの劳工区に分けられ、住宅や商労働者が集まる市が建設されている(図-1)。『備忘録』第六章建築業「大港の工事」によれば、埠頭区には道路網が形成されたが、施設は主に倉庫、船の工場などであった。租借地内の海湾、山及び欧州人区の街路はすべてドイツ語で命名され、中国人区と劳工区は中国語で命名された。

都市建設と平行して、林業を重視するドイツ政府は郊外の景

\*筑波大学システム情報工学研究科

\*\*筑波大学システム情報系

観を向上させ、上水を改善するために 1898 年に青島の丘陵や山に植林する計画をたてた<sup>11)</sup>。1900 年にはドイツ総督府は第一期植林する用地としてイルチス山(現太平山)、ビスマーク山(現青島山)、モルトヶ山(現貯水山)を購入した<sup>12)</sup>。最初、地元の樹木が少なかったため、緑化用の苗木は主にドイツ、日本、及びそのほかの東アジアから輸入された<sup>13)</sup>。このうちには当時ベルリンの市樹であったニセアカシアは<sup>14)</sup>青島の市街や山で最も多く使われ、現在でも青島の緑地に多く残っている。ドイツはニセアカシアで自国の景観の特徴を作り出す計画意図があったと推測される。注意すべきは、クロマツと桜は何れも日本の樹種であるが、この時期に青島に輸入されたものだったことである。

1906 年、軍事上の理由より、ドイツ膠奥地区砲兵管理部門は小鮑島山間の窪地(現貯水山の南)に移された<sup>15)</sup>。これに関しては、1906-1907 年の『備忘録』第六章建築業の「小鮑島谷地砲兵倉庫施設」に「小鮑島の谷地にビルが一棟、庫が二ヶ所、銃器工場及び附属施設が建設された」と記されている<sup>16)</sup>。弾薬庫と大港を連結する鉄道も敷かれていた。建物と鉄道の工事爆破によって生じた石材は谷のダムと貯水池の建設に使用された<sup>15)</sup>。また、周辺には一年生ニセアカシア 26,400 株、二年生クロマツ 78,000 株及び数万株の広葉樹と桜など多くの種類の日本の観賞樹木が植えられた<sup>15)</sup>。

ドイツ時期にはこのような公園の機能を持っていた緑地が多く作られたが、公園制度自体が未整備であり、都市計画の中に位置づけられなかった。

### 3. 青島神社の形成と景観特徴

#### (1) 青島神社の創建

日本は 1914 年 11 月に青島を占領した。青島は日本人に開放されたため、占領直後から青島に住む日本人の数が急激に増加した。ドイツ時代の人口調査によると、1913 年に青島に在住していた日本人はわずかに 316 人であり<sup>17)</sup>、総人口(60484 人)の 0.5% をしめていたに過ぎない。ところが、1915 年 12 月の調査によると、青島の日本人は 11,009 人に達し<sup>18)</sup>、総人口(76,588 人)の 14.4%にも及んでいた。人口の激増に伴い、都市が拡張する段階を迎えた。

1915 年には日本はドイツが建設した部分をもとに、青島の拡大工事計画を編成した。その中に掲載されている「青島市街図」

(図-1)によると、まず、都市の範囲は小港から大港一帯に拡張していった。そして、市街地における海湾・山・街路等のドイツ語の名称はすべて日本語に変えられたことが知られる。しかし、中国人が建設した大鮑島市街地、台東鎮と台西鎮の名前はそのまま使われている。

都市を拡大する工事は三期に分けられた<sup>19)</sup>。第一期の工事は埠頭区と大鮑島間の新市場、若鶴山(現貯水山)西側の市街地、小港北東側の市街地が指定された。中には主に緊急に必要な住宅及び学校、墓地、郵便局などの施設が含まれている。若鶴山付近の大和町一帯には住宅地、花咲町には第一小学校、若鶴山には青島神社が計画された。第二期工事は都市が拡張する次の段階を想定し、主に台東鎮と大港の間及び南東部忠ノ海の海岸に設定された。台東鎮の西北部に工場用地、大港一帯の予定市街が計画された。第三期工事は主に大港の浅瀬一帯約六十万坪を埋立し、商業市街とするものであった。こうして、若鶴山の北側に工場、西側に住宅地、南側に学校、東側に日本人墓地など様々な施設が集まって(図-2)、人々を引きつけ、山が市街の中心の一つになっていったと推測される。

前述のように、青島神社は重要な公共施設であり、第一期工事に含まれていた。1919 年の『神社協会雑誌』「各地通信欄」には青島神社社務所の通信を掲載しており、青島神社の創立の経緯

が次のように記述されている<sup>20)</sup>。

大正三年十一月七日皇軍の青島を占領するや、青島守備軍司令官神尾大将、浄法寺参謀長、吉村軍政委員長などの間に於きて当地在住邦人の国家的中心と仰ぐべき一神社創立の議起り専ら調査準備を急ぎ、将来何時にても直に官弊大社と仰ぎ得べき程度の規模となさむとの方針の許に、建築設計は技師加護谷裕太郎氏主としてそれを担当することとなり、六年一月末建築設計完成す。

これによれば、日本の「国家的中心」、象徴的な施設として、青島神社の創立の議が起こり、調査の準備は青島が占領されたのち早いうちに始まったことが知られる。計画がたてられてから五年後の 1919 年 11 月には本社青島神社は竣工し、鎮座の祭儀が行

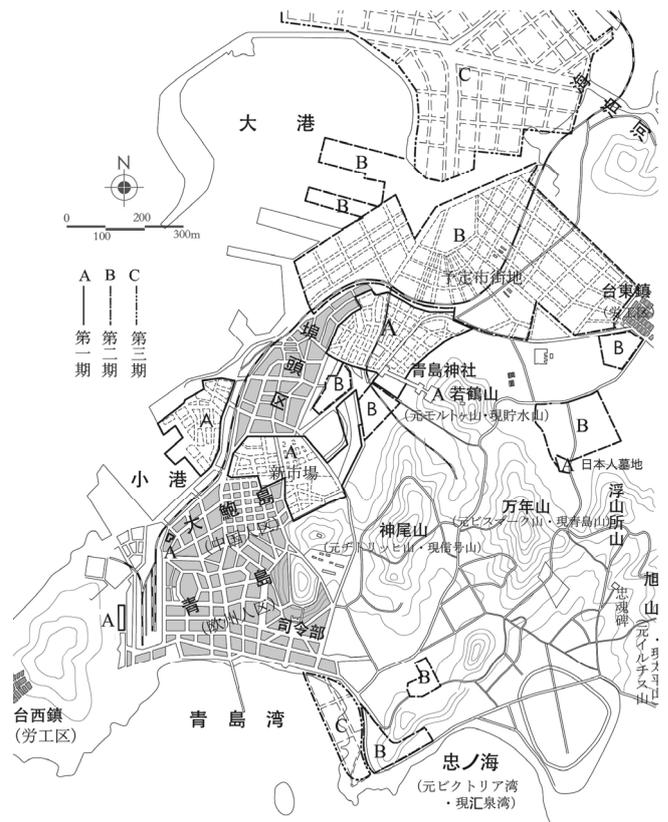


図-1 青島の工事計画(「青島市街工事計画図」付図「青島市街図」<sup>19)</sup>により作成。\* 図中の網かけ部分はドイツ時期に建設されたもの



図-2 神社の立地(1919年の市街地図より作成)

われた。神社創立事業に関する費用は総て臨時軍政費より支出し、概略銀十二万圓になったが<sup>20)</sup>、その後民営に移された<sup>20)</sup>。

神社境内には本社青島神社とは別に、摂社金刀比羅神社、摂社稲荷神社も建てられた<sup>20)</sup>。1932年の『神社協会雑誌』「青島神社及忠魂碑の近況」には、「六月十四日青島稲荷神社地鎮祭執行、十月四日青島稲荷神社上棟祭執行、十一月十四日鎮重祭執行」と稲荷神社の創立過程が記録されている<sup>20)</sup>。

本社青島神社の中には天照大神、明治天皇と国魂大神が奉祀されていた<sup>20)</sup>。創建時の神社の宮司は遠山正雄で、春と秋の例祭、歳旦祭、元始祭、成婚奉告祭、紀元節祭、明治天皇祭などが行われていた<sup>20)</sup>。「春と秋の例祭になると、青島全市から小学生（高学年）、中学生、女学生が教師に引きつけられて何百人とあつまる。青島日本中学校の四年生と五年生、合計約二百人ほどは、三十年式の銃を肩にし、銃剣をさげ、ゲートルを巻いて、集団参加する。神社は宗教的というより軍隊的である」と戦争の時に青島に住んでいたある中国人S先生の言説が記録されている<sup>20)</sup>。一般の日本人に対しては、神社が結婚やお産、病氣平復祈願等の信仰にも応えていたし、後述のように満開の桜が民衆に歓喜をもたらした。

青島神社は他の都市、満州国や日本国内の学校の見学団を多く迎え入れていた。例えば、「昭和二年八月二十六日大谷大学鮮満北支那見学団、十月二十日埼玉県教育視察団と満鉄教員北支那見学団が青島神社を参拝した」と記されている<sup>20)</sup>。青島神社の社格は高く、影響力が強かったことがうかがえる。

## (2) 青島神社の特徴

青島神社は日本人関係の施設が集まっていた場所に立地していた。参道のすぐ南側に高等女学校があり、女学校の「成績品」（課題作品か）は神社の繪馬殿に陳列されたこともある<sup>20)</sup>。

前述のとおり、1899年からドイツ総督府がモルトヶ山にも植林していたため、日本が青島を占領した時には森林は相当成長していたと推定される。森林は日本の神社に不可欠な要素であると考えられるから、これは若鶴山が選定されたもう一つの理由であると考えられる。

神社の入り口は若鶴二丁目（現遼寧路）に面する西側にあった。参道は西から東に伸び、拝殿、本殿も西側に正面が向けられ、日本の多くの神社が南側を正面としているのとは大きく異なっている。だが、ソウルにある朝鮮神宮と台北にある台湾神社の配置図<sup>20)</sup>を合わせてみると、植民地の神社の入り口が設置される際には一定のルールがあったと考えられる。ソウルは日本の北西部にあり、朝鮮神宮の入り口も北西部に設けられた。台北は日本の南西部にあり、台湾神社の入り口も南西部に設けられた。青島の緯度（北緯 36.06）は東京（北緯 35.41）とほぼ同じであり、東京の西に位置している（図-3）。そして、神社の入り口も西側に設けられていた。この三つの大規模な神社の入り口の方向を合わせて考えると、おそらく日本人は自国への求心的な地理認識を有し、日本の方向に向って神社に参拝するために、神社の入り口をそれぞれの方位に設けたのではないかと推測される。

神社の入り口から西へ真直に伸びている道路は「宮前町」（のち神社町、現包頭路）と名付けられた。道路の名前と位置を考えると、宮前町の中心の街路は青島神社の参道として計画された可能性が高い。1948年の雑誌『LIFE』に掲載された写真には神社町の南側にある店の看板に「CAFE」と書かれている。写真の説明文として「American named bars and restaurants lining the street（米国人がこの道に沿うバーやレストランに名前を付けた）」という記述がある。おそらく日本時期には既に宮前町を中心として、コーヒーショップ、レストランが多く立ち並ぶ、にぎやかな門前町ができていたと推測される。

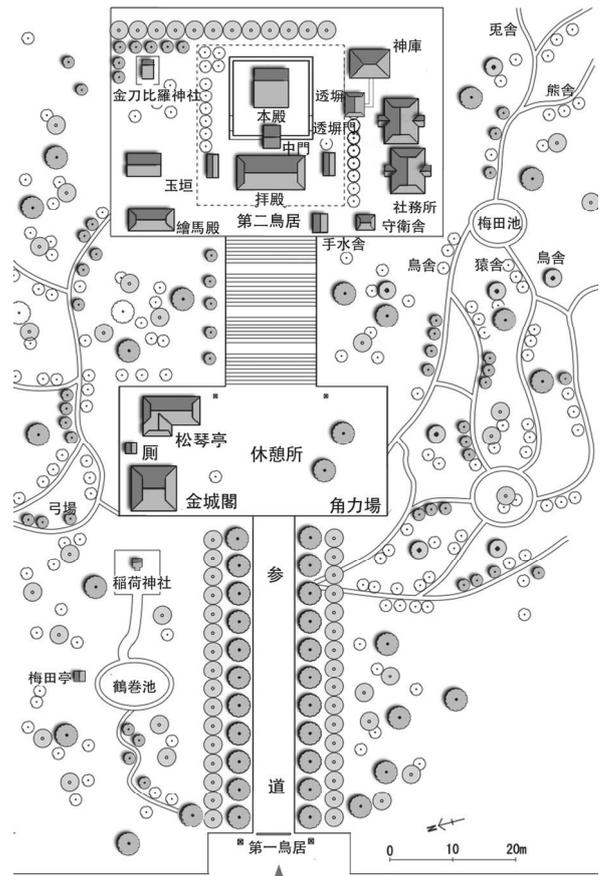


図-3 青島神社の配置復原図  
 (『青島神社図説』<sup>20)</sup>と「青島神社創立二関スル件申請」により作成)



写真-1 参道両側の (http://qingdaopage.com/file/00811.html)

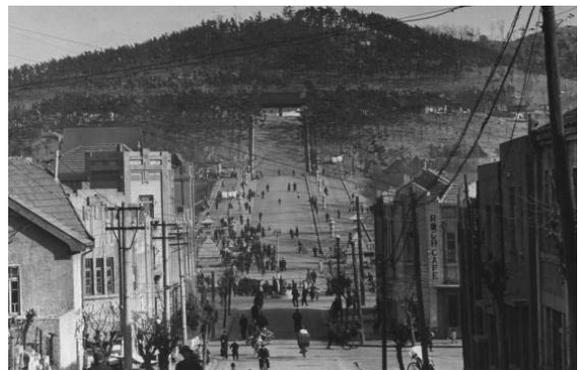


写真-2 包頭路と神社 (『LIFE』雑誌写真档案から<sup>30)</sup>)

次いで、全体の構成については「神社は上下の二段となす。上段は二千七百坪、下段は一千六百坪、両者と連絡する花崗石の階段は幅員八間、百二十段である。建造物は本殿、中門、瑞垣、拝殿、玉垣、仮神饌所、仮倉庫、神庫、第二鳥居、仮社務所、守衛社、第一鳥居、手水社、社号標などがあった」とある<sup>30</sup>。第一鳥居から、本殿背後までまっすぐな軸線に貫かれており、これに沿って上記の施設が左右に並べられていた。軸線の景観は山の高さを利用し、神社の秩序、礼儀、尊厳の意味を強調した。図-3は青島神社の復原図である。「青島神社創立ニ関スル件申請」に記載された計画段階のものと比べると、おおむね実際に建設されていたことが分かる。

日本は神社境内に自国の象徴とする桜を大規模に植えた。特に注目すべきは、参道の両側に桜並木が対称に配置されていたことである(写真-1)。それに加え、1924年3月には境内の女学校上方一帯の境内林6,000余坪が開拓され、全て桜樹が植えられた<sup>30</sup>。『神社協会雑誌』には「神苑植込桜樹高さ一丈内外のもの二百一十本及高さ五尺以内のもの(三年生、五年生)三千七百十七本植込みを了せしが、大木二百余本の方は悉く開花参道並木の桜と爛漫を競う。満開の前後に亘る一旬間は、団楽の家族、各種団体、同家族会、各町内運動会等始め日本在住者の観桜催しは悉く境内に集まりて甚盛なり」と桜満開の賑やかな情景が記録されている<sup>30</sup>。桜だけではなく、『青島神社図絵』によると、松、ヒノキ、梅等多くの種類の樹木が配置されており、季節により変化する豊かな植物景観が形成されたと推測される。

また、境内には日本の伝統的な武術や遊興のための施設が数多く建設された。「大正十三年四月十三日神社敷地下段南方に周囲に並植、中に野天土間で、「鞍馬式」と呼ばれていた剣術道場が設けられた」と記されている<sup>30</sup>。そして、相撲場、弓場が神社に造られたし、参道両側には池、亭、散歩道も設けられ、遊興の場所が作り出された。また、神社境内の南側に兔舎、熊舎、鳥舎、猿舎などが描かれており、小さい動物園が形成された。こうしたら、神社は公衆の信仰と遊興の機能を兼ねていた。

詳細は不明だが、第一次日本時期には公園の整備計画がたてられていたものとみられ、「遊覧休養、娯楽、運動並びに市街の記念装飾を主目的となす」緑地は普通公園として、「風景調和、水源涵養」の森林は天然公園あるいは森林公園として位置づけられていた<sup>30</sup>。青島神社境内は公園の名前が与えられていなかったが、観賞樹木、運動する場所、動物舎などが設けられたため、『土木誌』に普通公園として記録されている。したがって、この時期には貯水山公園が成立したと考えられる。

### (3) 支配の変遷に伴う貯水山の変容

1922年には中華民国政府が日本政府から青島の主権を回復した。農林事務所が日本時期の公園を基にして、青島市内の公園を再整備、新規開設し、大小公園19ヶ所が形成された<sup>30</sup>。しかし、日本人居留民は引き続き青島に滞在していた。そのため、日本人の日常生活に必要な施設も日本の財産として保留されていた。

「山東懸案解決に関する条約」の第七条には「膠州ドイツの旧租借地の公共財産の中の日本居留民団体の公益に欠くことのできない学校、寺院、墓地などは、日本の保留財産として居留民団が管理する」と書かれている。附約によって、面積56,695㎡である青島神社は日本居留民の公益地として保存された<sup>30</sup>(図-4)。

1935年1月には青島工務局は「青島市施行都市計画方案初稿」(以下、「施行方案」)<sup>30</sup>を編成した。「施行方案」の第八章の「全市園林空地の計画」には「園林空地は水面など家屋、街路がない、市民たちが遊興、休憩と運動する空間を提供する場所である。」と定義されている。これらは森林、公園、運動場、小運動場、競馬場、ゴルフ場、水面、広場に細かく分けられて、面積5,000ヘクタールで、都市全体の36.4%をしめるように計画された。森林については「海拔が六十メートル以上の山地は森林保留地に指定する」と規定されている。此の規定によれば、貯水山は森林保留地になって、性格が変わらなかつたものと推測される。公園の計画については「市区内の公園が少ないので、現在の公園は建築地にはしてはならない。将来市区を拡大する時には、面積五十ヘクタールの範囲内には必ず小公園一ヶ所を設ける」と述べている<sup>30</sup>。

しかも、此の段階の計画によって、都市の範囲は日本時期よりさらに北側に拡張され、シビック・センターが大港の東、貯水山の北側に移され(図-5)、山は都市の中心緑地となり、その地位が一層上がるはずであった。しかし、「施行方案」が未だ実施されていない段階で、中日戦争が勃発した。

1938年に日本は再び青島を占領した。1941年、日本政府は「青島母市計画図」を公布したが、1947年の市街地図と1940年の市街地地図を比較すると、都市の建設はあまり進められていなかったことが分かる。青島神社は変わらずに1945年まで市街地図に描かれている<sup>30</sup>。

1945年の日本の敗戦後、中華民国政府は戦死者を供養するために、青島神社を忠烈祠として使用した<sup>30</sup>。1947年の市街地図によると、神社の場所には「忠烈祠」、隣には「中国公園」と書かれている(図-6)。公園の名前を変えることによって、おそらく日本の景観と区別し、中国の尊厳を強調したかったためと考えられる。1948年12月のアメリカ雑誌『LIFE』<sup>30</sup>には青島の都市景観、人々の生活などに関する特集写真42枚が掲げられている。その中には神社の写真が2枚含まれている。其の一枚は包頭路からとられた神社の写真である(写真-2)<sup>30</sup>。この写真によると、第一鳥居、第二鳥居、附属施設及び参道両側の樹木は既にとり除かれていたが、階段の上にある拝殿など重要な建物はまだ残されている。しかし、後述のように、1956年には公園の道路、植生が整理されたことから、神社の建物はその前にもうすべて撤去されたと判断される。

## 4. 児童公園の成立と特徴

### (1) 児童公園の成立



図-4 青島神社及び周辺  
(1937年の「最新青島市街一覽図」による)



図-5 貯水山及び周辺  
(1935年の「大青島市発展計画図」による)



図-6 中国公園及び周辺  
(1947年の「青島市街道図」による)

中華人民共和国が成立してからの青島市の公園の建設活動は、回復（1951-1955年）、建設（1956-1964年）、破壊（1966-1976年）、回復（1978-1982年）、大規模建設（1984年）の五段階に分けて理解されている<sup>38)</sup>。1950-1951年には続けて二回大規模な植樹活動が行われ、市内の山が緑化されたが、貯水山もこの中に含まれていた<sup>39)</sup>。1956年には公園の主要道路が修築され、元参道の両側にはヒマラヤスギが補植された。そして、山頂には黒松、アカシア、ハコヤナギが植えられ、山麓には池が整備され、池の側には柳が植えられた。同年、公園の名称は「貯水山公園」に定められた<sup>40)</sup>。

児童公園として建設が始まったのは80年代である。1982年に青島市政府、婦人連合会が資金を寄せ集め、子供たちの娯楽施設、十二支の動物の彫塑が設けられた<sup>41)</sup>。1984年の「青島市全体都市計画」には青島市の園林緑化について「海岸緑化に重点を置いて、山頂の風景を強調し、点、線、面を合わせ、(中略)、青島の緑化システムを全体化させ」と目標が提出された<sup>42)</sup>。同年3月12日と6月4日には青島市政府が「山を閉鎖し、植樹・造園するお知らせ」と「山頂公園十ヶ所<sup>43)</sup>」を建設するお知らせを出し、青島の山々に植林し、公園を作る活動が始まった。

貯水山は山頂公園の一つとして植林されたほか、子供センターが建てられた。公園は「青島市児童公園」と命名された<sup>44)</sup>。1986年7月6日にはさらに「青島市貯水山児童公園」と改称されている<sup>45)</sup>。『青島市志』（園林緑化志）によると、80年代の青島市の公園は総合公園、動物園、植物園、児童公園、記念公園と地区公園に分けられており、貯水山公園は青島市唯一の児童公園として記録され、また、現在でも唯一の児童公園のである位置づけは変わっていない。

## (2) 公園の特徴と神社の影響

貯水山児童公園の施設や植物景観は中国風に改変されたが、青島神社からのいろいろな影響が見られる。

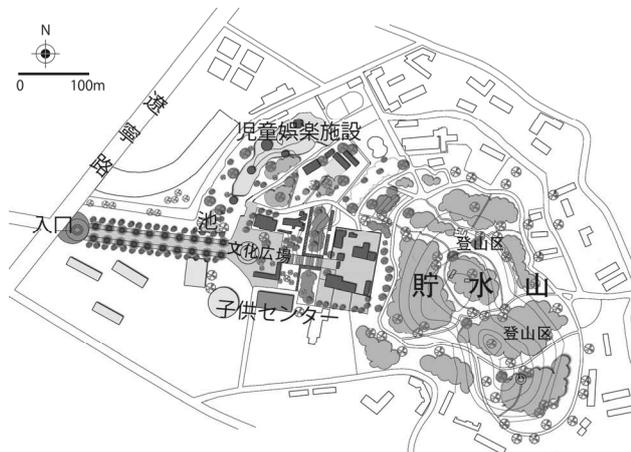


図-7 貯水山児童公園及び周辺  
(公園の案内図と航空写真により作成)



写真-3 公園の入口  
(筆者撮影)



写真-4 参道に植えられた  
ヒマラヤスギ (筆者撮影)

まず、貯水山公園は遼寧路（日本時代の若鞆町）の東、貯水山に立地しており、公園の入り口は神社当時のまま西に設置されている。ただ、第一鳥居の位置には現在、広場、噴水と彫刻、アーチの門が立っており、現代公園の雰囲気を示している（写真-3）。次に、貯水山公園は入り口から、山腹にある階段までまっすぐの軸線を持っており、記念的な景観の特徴が強く感じられる。これは神社の空間構成からの影響である。また、前述のように、桜並木は神社の一部とみなされ、1948年頃既に伐採されていた。桜の代わりに、1956年に、道路の両側にヒマラヤスギが植えられた（写真-4）。ヒマラヤスギは松科に属し、寿命が長くて寒さに耐えられる特徴を持っている。松は昔から中国人に特に詩人や画家に愛され、徐々に「強韌」「節操」の文化的象徴になった。現在、中国の陵墓などの記念景観には松が多く使われている。貯水山公園の桜がヒマラヤスギに替えられたのは日本の文化的象徴を中国の文化的象徴に変える意図があったと推測される。

軸線の北側にある池の位置は、神社の鶴巻池の位置と大体一致し、それは神社の池をもとに整備されたと考えられる。池のそばに中国風の亭、棧道が設けられ、中国古典庭園の要素が加えられた。元参道の南側にあった公園、動物園も建て替えられ、子供センターが建設されている（図-7）。一方、貯水山の西側にはP.C.モール、レストラン、アパートなど新たな商業施設が多く立地している。宮前町を中心としてできた神社の門前町の商業街的性格は変わっていないが、新たな建物の高さは山の高さを超えており、神社が元来持っていた神聖感は著しく減じられた。

現在、貯水山公園は市民に開放され、都市の重要な公共空間として使われている。毎日市民たち、特にお年寄りの方々がここで散歩したり、ダンスをしたりして、のんびりと過ごしている。また、毎年、正月にここで一週間の大根祭りが行われており、貯水山公園は新しい形式で青島市民の生活に適合している。

## 5. おわりに

以上のように貯水山ではドイツ、日本、中国三国の文化の影響を受けつつ、現代都市公園が形成されてきた。その中では日本の影響が最も強かったと考えられる。前述のように、日本時期の都市計画によって、貯水山の周辺には商業、工業、住居など様々な施設が集まって、ドイツ時期の郊外地から市街の中心になった。そして、日本の文化では山が神聖な場所と見なされるため、貯水山は青島神社の鎮座地として選定された。その後1945年までの間には青島神社はずっと日本人に管理され続けた。このように長い時間存在した青島神社は現在の公園の立地、入口、構成に大きな影響を与えた。一方、中国人にとって神社は中国の寺廟と似ているから、青島神社が「日本大廟」と呼ばれ、山も「大廟山」の名称を与えられた。神社はその後取り除かれたが、「大廟山」という名称は現在まで通称として用いられている。青島神社の影響が強すぎて、ドイツの文化の影響はほとんど見られなくなった。ただ、初期に水源の役割を果たしたと言う事実は現在でも貯水山という名前にその名残りをとどめている。

新中国が誕生して以後、緑地の機能が重視され、何度も再整備されて、現在の貯水山公園が形成された。入り口の彫刻、古典風の庭園、参道両側のヒマラヤスギなどの施設と植物景観で中国の文化が強く示されている。しかし、象徴的な施設は撤去されたものの、空間構成から神社の面影が見られるし、山頂の緑化の基調樹種であるニセアカシアとクロマツも認められ、公園には三国の文化が映っている。

### 補注及び引用文献：

- 1) 青島市人民政府：「青島市都市全体計画（1995-2010）」、15pp
- 2) 公園の名称は時期によって変化するが、以下「貯水山公園」で統一す

- る。ただし、改称があったことは文中に明示する。
- 3) 青島市档案馆 (2007) : 『膠澳發展備忘録』全訳, 中国档案馆出版社。『膠州湾發展備忘録』はドイツ青島総督府が作成した政府の業務報告である。1898年10月から出版され、1910年に『膠澳年鑒』に変更され、青島の17年の歴史を記録した。
  - 4) 田久江南 (1921): 『青島要覽』, 新極東社発行
  - 5) 『欧受大日記』は陸軍大臣官房が編集して保存した陸軍省大日記の一連の文書の一部である。青島に関する欧受大日記は青島守備軍が発簡または接収した文書が編まれた薄冊である。その中に、皇室、外交、礼儀、教育、編制、軍需、作戦、婚姻、葬祭などに関する書類が収められている。本論文ではアジア歴史資料センターのホームページ (<http://www.jacar.go.jp/>) 上に提供されている史料を主として使用した。
  - 6) 趙琪修・袁榮 (1928) : 『膠澳志』, 成文出版社, 121pp。『膠澳志』は青島の沿革、範囲、民社、政治、食物、交通、教育、建置、財税、人物、芸文、大事の全12巻にわたり、青島の歴史を記録している。
  - 7) 中・日の研究者徐飛鵬・村松伸らが著した『中国近代建築総覧-青島篇』が青島における近代建築の位置、機能、設計者と竣工の日付を記録している。ドイツ研究者ワーナーの『中国におけるドイツ建築』(Torsten Warner, *DEUTSCHE ARCHITEKTUR IN CHINA Architekturtransfer*; Ernst & Sohn, 1994) の中に青島においてドイツ時期に建設された建築についての記述がある。近年、青島建築に関する修士論文が多く出てきた。例えば、華僑大学の陳驊「近代青島建築研究」(2007)。南京林業大学の王福雲「青島近代別荘建築及び環境芸術研究」(2007.6)。青島理工大学の徐強「青島近代教会建築の特徴」(2010.6) が青島各種類の建築を研究している。
  - 8) 青島の都市計画に関する研究は武漢理工大学李百浩研究室が行っており、李彩の修士論文「青島近代都市計画歴史研究」(2005.5) が青島の都市計画を三期に分けて論じている。ドイツのワーナーの『近代青島の都市計画と建設』(東南大学出版社, 2011) がドイツ時期の都市計画と建設を研究している。
  - 9) 鄭愛芬 (2010) : 「青島市公園緑地木質植物の多様性」, 南京林業大学修士論文
  - 10) 前掲 3), 13pp
  - 11) 前掲 3), 55pp
  - 12) 前掲 3), 81pp
  - 13) 前掲 3), 108pp
  - 14) 青島市史志事務室・林業局・都市園林局 (2007) : 『青島古樹名目志』, 中国海洋大学出版社, 66pp
  - 15) Jork Artelt (2011.5) : Tsingtau, Deutsche Stadt und Festung in China 1897-1914. 青島档案馆訳, 『青島都市と軍事要塞建設研究 (1897-1914)』, 青島出版社, 65. 140pp には1907年のモルトケ山とビスマーク山の防御施設平面図が掲載されている。1913年の青島市街地図にモルトケ兵営が描かれている。
  - 16) 前掲 3), 532pp
  - 17) ワーナー (2011) : 『近代青島における都市計画と建設』, 73pp に転載されている。
  - 18) 青島守備軍大正四年度第一統計年報, 第三人口
  - 19) 「外務省記録」の「山東占領地処分一件別冊/細目協定関係/公有財産問題参考資料一/青島市街工事計画」に付図「青島市街図」が掲載されている。「外務省記録」は明治初期の外務省創立以来第二次大戦終了までの約80年間の在外公館との往復電報・公信類をはじめとする外交活動ともなう史料であり、前述のアジア歴史資料センターで提供されている (<http://www.jacar.go.jp/DAS/meta/MetaOutServlet>)。
  - 20) 神社協会 (1919) : 『神社協会雑誌』, 第十八年, 第十二号, 33pp。『神社協会雑誌』は神社協会が1902年に創刊、1938年に終刊した神社研究に関する雑誌である。その中の「各地通信欄」には日本が海外で建設した神社も掲載されている。
  - 21) 青島守備軍 : 『欧受大日記』第五三七号, 「青島神社創立に関する件申請」
  - 22) 前掲 20) (1932), 第三十一年, 第二号, 64pp。なお、金刀比羅神社の創立過程は記述されていない。
  - 23) 前掲 20) (1924) : 第二十二年, 第六号, 72pp
  - 24) 日高六郎 (2005.6) : 『戦争の中で考えたこと—ある家族の物語』, 筑摩書房, 107pp
  - 25) 前掲 20) (1927) : 第二十六年, 第十二号, 78pp
  - 26) 青井哲人 (2005.2) : 『植民地神社と帝国日本』, 吉川弘文出版社, 147-159
  - 27) 辻子実 (2007.2) : 『侵略神社』, 新幹社, 103pp
  - 28) 前掲 23), 72pp
  - 29) 青島守備軍民政部土木部 (大正九年五月) : 『土木誌』, 56-57
  - 30) 1922年中日「山東懸案解決に関する条約」及び附約が『膠澳志』「沿革志」「中国回復の顛末」に掲げられている。その第七条には日本保留財産が規定されていた。(甲) 日本領事館に必要な財産と(乙) 日本人居留民団に必要な財産に分けられている。乙は日本人会、化学試験所、青島病院、中学校、高等女学校、第一小学校、青島神社、忠魂碑、青島斎場、火葬場、墓地を含んでいる。
  - 31) 前掲 6), 122pp
  - 32) 青島工務局 (1935.1) : 「青島市施行都市計画方案初稿」。この中で序言、計画の範囲、都市発展の推測、計画の原則、中心部の計画、街路、公園システム、交通、衛生、土地整理、実施について詳細に論じている。
  - 33) 前掲 32), 37pp
  - 34) 折下吉延は青島特別市の都市計画の仕事を委嘱され、1940年に青島に移った(都市計画協会 (1967) : 『折下吉延先生業績録』, 126pp。1941年には折下が青島市青島神社境内を設計した(佐藤 昌 (1977) : 『日本公園緑地発達史』(下巻), 都市計画研究所, 391pp)。しかし、戦争があったため、実施されたどうか不明である。
  - 35) 青島市档案馆 (2010.8) : 『青島通鑿』, 中国文史出版社, 157pp
  - 36) 『LIFE』雑誌は1936年に発刊されたアメリカの雑誌である。2007年から内容はgoogleに移された (<http://images.google.com/hosted/life/7fcff6e591cfe6816.html>)。
  - 37) 二枚の写真のうち一枚は論文の中に掲げられており、もう一枚の写真はアメリカの兵士と神社の灯籠を写している。
  - 38) 青島市志事務室 (1997.8) : 『青島市志』(園林緑化志), 新華出版社, 79pp
  - 39) 前掲 38), 6pp
  - 40) 青島市志事務室 (1997.8) : 『青島市志』(旅行志), 新華出版社, 39pp
  - 41) 前掲 38), 24pp
  - 42) 前掲 40), 71pp
  - 43) 山頂公園十ヶ所は観海山、観象山、信号山、青島山、太平山、貯水山、嘉定山、北嶺山、楼山、烟敦山である。
  - 44) 青島市園林政務ホームページ <http://www.qdyuanlin.gov.cn/news>